

「テモテという弟子」使徒言行録16章1～5節

細井 茂徳

今朝の聖書箇所には、第2回伝道旅行においてパウロに同行し、彼の同労者となり、良き協力者となる「テモテ」という伝道者と巡り会った、そのことが記されています。

アンティオキアでバルナバと分かれて行動することになったパウロは、シラスを伴ってシリヤ州、キリキヤ州に向けて出発しました。陸路を使って第一回伝道旅行とは逆のコースを辿って進み、デルベ、リストラといった町にある、前回の旅行で誕生した諸教会を訪問し、信徒たちを励まそうとしたのでした。「そこ」(リストラの地)でその後パウロにとって特別な存在となるテモテと出会ったのでした。このテモテとの出会いは、パウロを慰めるとも意義深いものであったに違いありません。と言うのも、彼が前回ここで伝道した際、酷い迫害に遭い、その時に「信者」となったと思われる「ユダヤ人婦人」たちの孫・息子がテモテであったからでした(Ⅱテモテ 1:5)。しかもこのテモテという若い弟子は、これからパウロたちが向かうであろう先々の市民たち(ギリシア人とユダヤ人)の両方の文化・血統・考え方を一身に担っていた人であったことも、パウロを大いに力づけたことだったでしょう。

パウロは、その地を出発する前にテモテに「割礼を施した」(3節)とあります。異邦人に割礼など必要ないと言って、あれほど揉めて否定していたパウロがここでは「ユダヤ人の手前」テモテに割礼を受けさせた、というのです。これは一体、どういうことなのでしょうか？

もちろんパウロは救われるためには割礼が必要であるなどとは全く考えてはいないのです(ガラテヤ5:6, 6:15等)。パウロにとって、人が救われるか否かにおいて割礼の有無は問題ではなく、それは決して救われる要件、条件というのでもないのです。ただ、テモテがこれから先、ユダヤ人にも伝道していくためには割礼を受けさせた方が良いでしょう。ユダヤ人伝道を進めるためにその伝道の便宜上、ユダヤ人の中に入っていくために、このテモテもユダヤ人であるということを周知させていた方が良いでしょう。これが、根本的な理由であったのだらうと思います。

その結果、5節「**こうして、教会は信仰を強められ、日ごとに数を増していった**」のでした。私たちが世の人々に対して、すべての人にすべての人のようになってまいりましょう。福音のため、一人の救いのために。